



Title	2型糖尿病患者の事例を用いた看護過程演習にケアミーティングを取り入れた学習効果
Author(s)	高橋, 慧; 川村, 英理子; 韓, 里奈 他
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2021, 27(1), p. 35-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78980
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2 型糖尿病患者の事例を用いた看護過程演習にケアミーティングを 取り入れた学習効果

The Learning Effect of Incorporating a Care Meeting into the Nursing Process Practice
Using a Case of Type 2 Diabetes

高橋慧¹⁾・川村英理子²⁾・韓里奈³⁾・清水安子¹⁾

Kei Takahashi¹⁾, Eriko Kawamura²⁾, Rina Kan³⁾, Yasuko Shimizu¹⁾

要 旨

本研究の目的は、2 型糖尿病患者の事例を用い、ケアミーティングを取り入れた看護過程演習後の、学生の学びを明らかにすることである。3 年次の演習後のレポート内容を質的統合法 (KJ 法) を用いて分析した。その結果 (《》はシンボルマークを示す)、患者のストレングスや望む将来をケア計画に取り入れることで感じたことと考えたことは、《ストレングスと望む将来像の明確化のメリット：真のニーズの把握と主体性や自信の支援》や《慢性疾患患者支援への影響：押しつけからの脱却と妥協案の提示》があり、これらを学ぶ一方で《患者不在のケアミーティングへの危惧：患者と看護師の認識のずれ》といった課題が明らかになった。ケアミーティングを通しての気づきと学びは、《想像から創造へ：患者の希望の想像が患者の生活の見方を変え、具体策の検討に繋がった》や《改めて見つめる看護：気づきの大切さと看護の可能性の広がり》を学ぶ一方で、《実施上の注意点：限界を自覚し、患者を置き去りにしない》といった気づきを得ていた。これらの結果により看護過程演習にケアミーティングを取り入れることの有用性と今後の課題が明確となった。

キーワード：看護過程、看護学生、教育方法、事例検討、ケアカンファレンス

keywords : nursing process, nursing student, education method, case study, care conference

I. 緒言

看護基礎教育において、看護を実践する上で必要となる看護過程の展開を習得するために、紙上事例の患者情報をもとにアセスメントし、看護計画を立案する看護過程演習が行われている。しかし、学生にとって紙上の情報から看護展開を進めることには、情報が少なく身体的・心理的側面の理解が難しい、看護方針・患者目標を表現することが難しいといった、困難さが明らかとなっている¹⁾。

A 大学の慢性疾患看護学では、臨地実習開始前の 3 年次前期に 2 型糖尿病患者の事例を用いて看護過程演習を行っている。当大学においても、紙上のみの情報では患者のイメージが希薄で、患者の状況に合わせた看護計画を立案することに結びつきづらくなっている印象があった。これには、患者の問題を明確にするというアセスメント方法により、問題点に着目しがちであることが考

えられた。糖尿病療養では、患者が主体となり自己管理を継続できるように支援する必要があり、問題点への着目のみではなく、患者の持つ力や強み (以下、ストレングスとする) にも目を向け、療養に活かす視点も重要である。今後は、このことの指導方法を検討する必要があると考えた。学生実習において、患者のストレングスの視点を導入したことで、学生はこれを捉え看護に活かすことができたと報告されている²⁾。ストレングスに着目し、患者への支援を検討するプログラムとして、長谷川によって独自に開発されたケアミーティング³⁾がある。看護における事例検討は、困難事例の問題を解決するために行われることが多いが、事例提供者の準備の負担や発言のしにくさといった課題が指摘されている。一方ケアミーティングでは、現在持ちうる情報から患者のストレングスを推量し、患者にとっての幸福な将来像を仮想して、これを支援の方向性に定め、実現可能

¹⁾大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻、²⁾高知大学医学部医学科、³⁾聖バルナバ助産師学院

¹⁾ Osaka University Graduate School of Medicine, Division of Health Sciences, ²⁾ Kochi Medical School,

³⁾ St. Barnabas' Midwifery Academy

な支援を計画する。この手法を演習に取り入れることにより、学生が患者のストレングスを捉え、これを活かし、患者にとってのよい将来に向けた視点から看護計画を考えることができるのではないかと考えた。

以上のことより、2型糖尿病患者の事例を用いた看護過程演習に、ケアミーティングを取り入れることを試みた。本研究の目的は、ケアミーティングを取り入れた演習後の学生の学びを明らかにすることである。これにより、ケアミーティングを看護過程演習に取り入れることが有用であるかを検討でき、今後の学生教育に役立てることができるかと考える。

II. 研究方法

1. 対象者

2019年度に看護過程演習を受講したA大学看護学専攻3年生81名のうち、研究参加に同意が得られた者。

2. データ収集方法

看護過程演習では、40代男性の2型糖尿病患者で、外来通院を継続し、治療を行いながらも改善に乏しく、血糖コントロールと合併症精査のために入院となった事例を用いた。演習は、表1のように進行し、6・7回目の授業でケアミーティングを取り入れた。ここでは、学生6名程度を1グループとし、事例の現状を確認後、患者のストレングスを明らかにし、患者が望む将来像について具体的な場面を話し合った。その後、患者がその将来を過ごすために実現可能な目標と支援計画を立案し、全体発表を行った。ケアミーティ

ング終了後、「患者のストレングスや望む将来をケア計画に取り入れることについて、感じたこと・考えたこと」「ケアミーティングを通して、事例について新たに気づいたこと」「ケアミーティングを通して学んだこと」についてレポート記載を求め、その内容をデータとした。

3. データ分析方法

分析は、断片情報から論理的な整合性をもった統一体として全体像を表すことができる質的統合法(KJ法)⁴⁾を採用した。ケアミーティング後の学生個々の学びの内容から、学生全体の学びの構造を明らかにできると考え、この方法が妥当であると考えた。レポートに記載された3つの内容より、学生の学びを2つの視点から統合できると考え分析を行った。一つは、ケアミーティングの特徴である、対象者のストレングスと望む将来像を考え、ケア計画に取り入れることについて、学生が感じたこと・考えたことである。もう一つは、ケアミーティングを看護過程演習に取り入れたことを通して、学生が新たに気づいたこと・学んだことである。1つのラベルに1つの意味内容が含まれるよう元ラベルを作成した。元ラベルを繰り返し読みながら、類似性に注目してグループ編成を行い、グループ内のラベルの内容から表札をつけ、そのグループのラベルとした。グループ編成は、ラベルが6枚程度となるまで繰り返した。その後、最終ラベルの関係を適切に示す位置に配置し、相互関係を示す関係記号と添え言葉を記入して空間配置図を作成し、ラベルの中心的内容を読み取り、シンボルマークを作成した。

表1. 看護過程演習スケジュール

	授業形態	内容
1回目	講義、個人学習	看護過程演習についてのオリエンテーション 事例が持つ疾患について自己学習を進め、病態関連図を作成する
2・3回目	講義、個人学習	教員からのコメントを踏まえ、病態関連図の修正する 患者の情報を整理し、アセスメントする
4・5回目	講義、個人学習	教員からのコメントを踏まえ、患者の全体像を把握する 看護上の問題をあげる
6・7回目	グループ学習	ケアミーティングの実施 看護目標を立案し、優先順位をつける
7・8回目	講義、個人学習	教員からのコメントを踏まえ、看護上の問題を修正する ケアミーティングを踏まえ、看護目標・看護計画を立案する

4. 真実性の確保

研究の全過程において、質的研究に精通し、質的統合法(KJ 法)の指導者研修を修了した研究者よりスーパーバイズを受けた。

5. 倫理的配慮

研究者が、ケアミーティングのセミナーに参加し、その方法を学んだ後、開発者より、ケアミーティングを看護過程演習に取り入れること、および、研究論文としてまとめ公表することの許可を得た。

対象者に研究の趣旨と方法、レポート内容は研究目的以外には一切使用しないこと、個人情報保護に努めること、研究の参加不参加によって不利益を被ることはないことを説明し、書面にて研究参加への同意を得た。レポートに記載された学籍番号および氏名を除外して匿名化し、データは暗証番号の設定できる USB メモリに保存した。USB メモリは鍵のかかる場所に保管し、データの漏洩・紛失が起こらないように努めた。本研究は、大阪大学医学部附属病院倫理審査委員会の承認を得て実施した。(承認番号：19238)

Ⅲ. 結果

研究参加者は、受講学生 81 名のうち、研究参加の同意が得られた 72 名だった。

1. 患者のストレングスや望む将来をケア計画に取り入れることについて、感じたこと・考えたこと

「患者のストレングスや望む将来をケア計画に取り入れることについて、感じたこと・考えたこと」について記載された内容より 152 枚の元ラベルを作成し、7 段階目で最終ラベルが 6 枚となった。以下、シンボルマークを《 》、最終ラベルを< >、元ラベルを「」で示し、空間配置図について説明した後、シンボルマークの特徴的な元ラベルを説明する。

1) 空間配置図 (図 1)

患者のストレングスと望む将来を看護計画に取り入れることで、学生は《ストレングスと望む将来像の明確化のメリット: 真のニーズの把握と主体性や自信の支援》に気づき、だからこそ《慢性疾患患者支援への影響: 押し付けからの脱却と妥協案の提示》に気づき、患者と援助者には《相互作用への影響: 患者への愛おしさと信頼関係が生む好循環》があると気づいていた。しかし、《ストレングスと望む将来像の明確化のメリット:

》がある中で《ケアミーティングで感じた難しさ: 限られた時間での計画立案と多様な生活状況への対応》の困難さに気づいており、《ストレングス重視への危惧: 問題の見落としや問題解決思考の軽視》や《患者不在のケアミーティングへの危惧: 患者と看護師の認識のずれ》の可能性にも気づいていた。

2) シンボルマークと特徴的な元ラベル

(1) 《ストレングスと望む将来像の明確化のメリット: 真のニーズの把握と主体性や自信の支援》
「患者のストレングスが、多ければ多いほどケア計画は立てやすいし、患者が望む将来を具体的にイメージすることで、ケア計画はより具体的になり、立てやすくもなると思う。」

(2) 《慢性疾患患者支援への影響: 押し付けからの脱却と妥協案の提示》

「教科書に載っていたり、世間で言われていること(禁酒、食事制限)は大切だけど、ずっと続けることが、生活している中では難しいと実感できたので、もっと患者の人生や生活を考えて寄り添わなくてはいけないと感じた。ずっと人生で付き合い合っていく病であるので、辛すぎない、ストレスがたまらない、代替案を提示する必要があると感じた。」

(3) 《相互作用への影響: 患者への愛おしさと信頼関係が生む好循環》

「患者の強みを考えることで、私たちのメンタル面でも、悪いことやリスクばかりを考えていた時よりも、明るく前向きな気持ちでいれると思った。」

(4) 《ケアミーティングで感じた難しさ: 限られた時間での計画立案と多様な生活状況への対応》
「ケアミーティングは初めてしたけど、時間もきっちり決まっていたし、具体的に考えなくてはならなかったから難しかった。」

(5) 《ストレングス重視への危惧: 問題の見落としや問題解決思考の軽視》

「ストレングスにのみ目を向けていると、問題を軽んじてしまったり、見落とししてしまったりするのではないかと思うため、問題に向き合って解決することも重要であると思う。」

(6) 《患者不在のケアミーティングへの危惧: 患者と看護師の認識のずれ》

「患者のストレングスを上手く使うことは、とても有効だけど、患者の望む将来については、それが本当に患者の希望なのか確認し、患者のペース

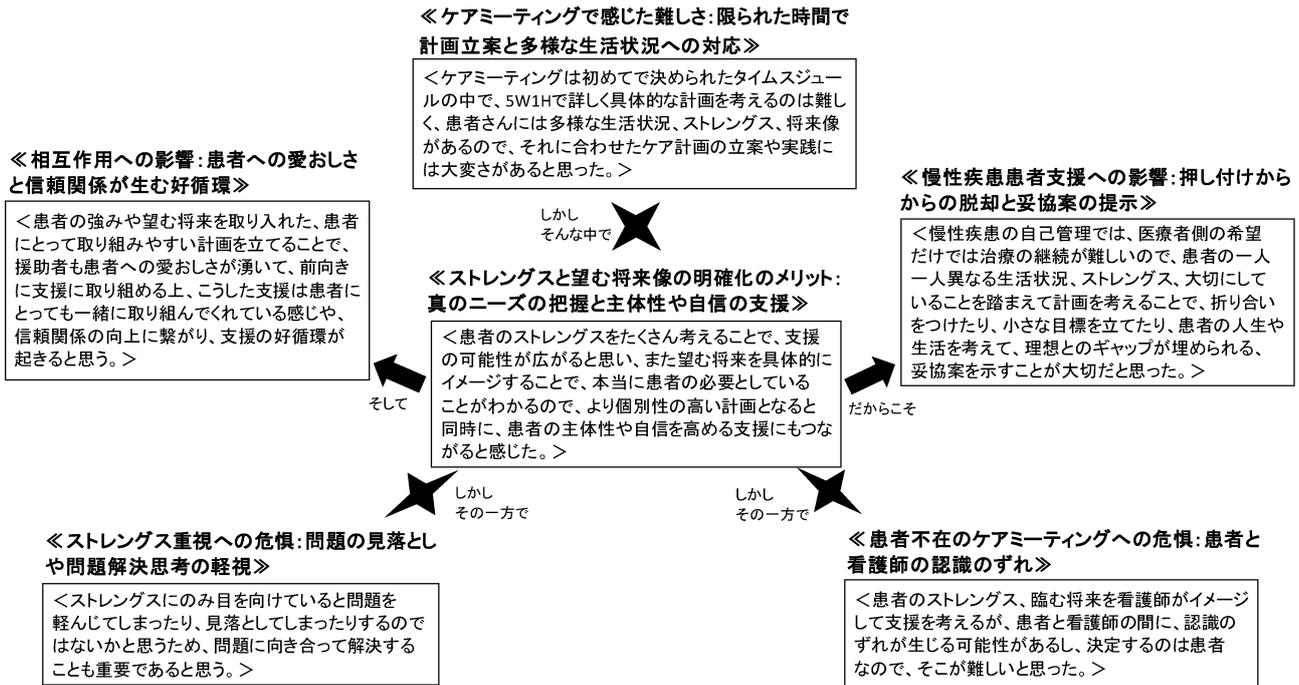


図1. 患者のストレングスや望む将来を計画に取り入れることについて、感じたこと・考えたこと

に合わせて進めていくことが、大切だと思った。患者目線でケア計画を考えていくことが、重要だと思った。」

2. ケアミーティングを通して気づいたこと・学んだこと

「ケアミーティングを通して事例について新たに気づいたこと」「ケアミーティングを通して学んだこと」について記載された内容より 369 枚の元ラベルを作成し、8 段階目で最終ラベルが 6 枚となった。

1) 空間配置図 (図 2)

ケアミーティングを通して、学生は「想像から創造へ：患者の希望の想像が患者の生活の見方を変え、具体策の検討に繋がった」に気づき、それゆえに「チームへの影響：多角的な患者像の共有と意見交換で共に成長できる」と「実践への影響：患者と医療者両者の意欲の向上に繋がる」という気づきに繋がっていた。そして、これら 3 つの気づきは、「改めて見つめる看護：気づきの大切さと看護の可能性の広がり」という学びに繋がっていた。しかし、「チームへの影響：」と「実践への影響：」を考える際は、「実施上の注意点：限界を自覚し、患者を置き去りにしない」があることを学んでいた。さらに、「チームへの影響：」で患者の希望を共有し、具体策を検討するためには、「時間管理の重要性を実感：制限があ

るからこそ集中できたし、時間内で話せるスキルを身につけたい」という学びがあった。

2) シンボルマークと特徴的な元ラベル

(1) 「想像から創造へ：患者の希望の想像が患者の生活の見方を変え、具体策の検討に繋がった」

「病気を持った患者を対象として看護を行うが、生活している人間であり、その人にとっての中心は、病気ではないことを意識しなければならないと学んだ。」

(2) 「チームへの影響：多角的な患者像の共有と意見交換で共に成長できる」

「意見を出し合うことで、患者にとって良いケアができるだけではなく、私達医療者も知識が増えるので、成長することができると感じた。」

(3) 「実践への影響：患者と医療者両者の意欲の向上に繋がる」

「ケアミーティングのように、客観的な情報の中から強みを見立て、夢の将来像を考えた上で実現可能な目標を立てるというプロセスを踏めば、患者の希望と医療者が考える理想の間で、上手く折り合いをつけられると学んだ。」

(4) 「改めて見つめる看護：気づきの大切さと看護の可能性の広がり」

「ケアミーティングを通して、患者の将来に目を向けることで、なぜ私達は情報をアセスメントして、看護問題を把握し、計画を立てるのか、何の

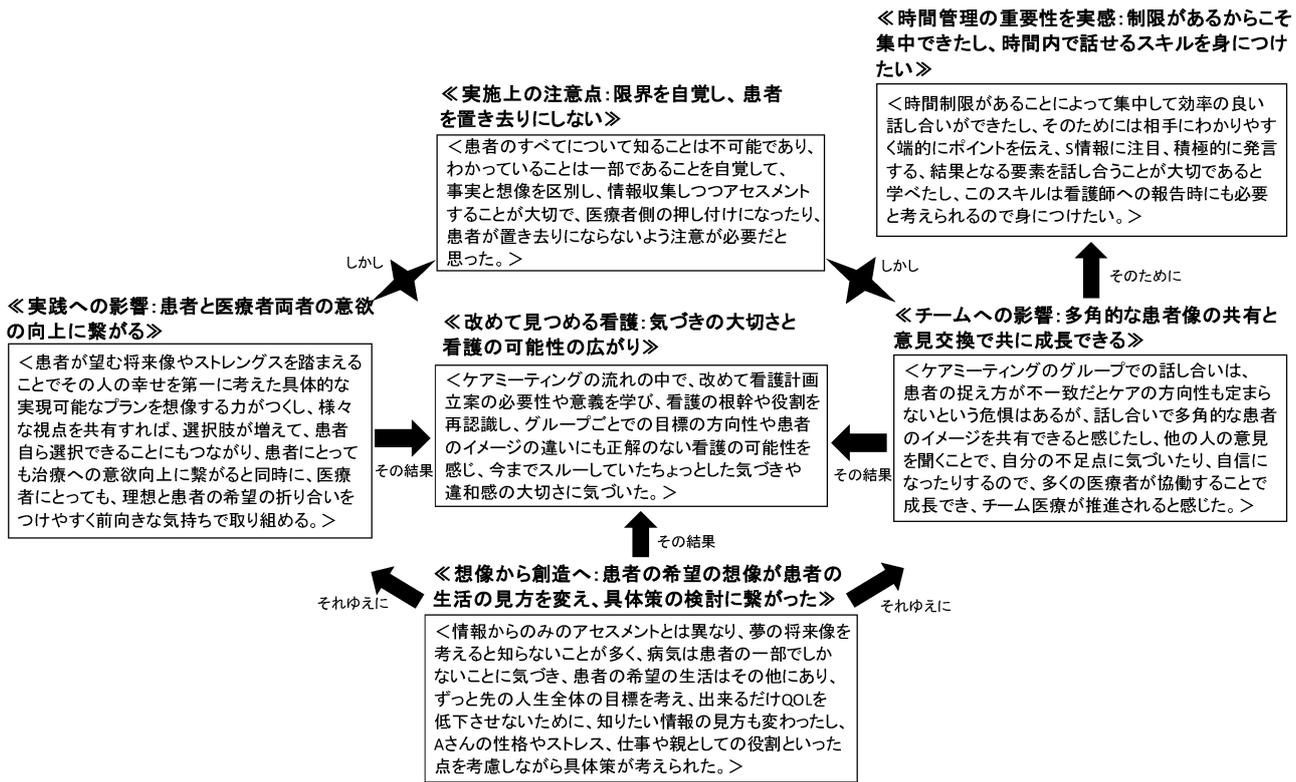


図2. ケアミーティングを通して気づいたこと・学んだこと

ために看護師がいるのか、看護という根幹を再認識したように思う。」

(5)「実施上の注意点: 限界を自覚し、患者を置き去りにしない」

「患者のことは本人にはかわからないもので、それを全て知ることは治療期間だけでは難しく、そもそもそれは叶うものでもないし、必要な情報は収集すればよいけれど、今持っている情報から、患者の評価すべきところはどこか、患者に必要なことは何かを考えていくべきなのだとわかった。」

(6)「時間管理の重要性を実感: 制限があるからこそ集中できたし、時間内で話せるスキルを身につけたい」

「決められた時間内に話し合っまとめるというのが難しく、特に一番始めの情報共有が情報量が多くて大変だった。どれも重要なデータだけけど、ケアミーティングを行う上では、患者さんのS情報を共有することが、特に大切だと思った。」

IV. 考察

1. 患者のストレングスと望む将来像を検討することの重要性について

ケアミーティングにより、患者のストレングスと望む将来像を考え、看護計画に取り入れること

で、学生は「ストレングスと望む将来像の明確化のメリット:」に気づいていた。患者のストレングスと望む将来像を考えたことをきっかけに、患者にどのようなニーズがあるのかを考えることができ、これを考えることが、患者の主体性や自信の支援にも繋がると気づけたことが重要であったと考える。糖尿病患者は、治療のために生活習慣の改善が必要になるが、患者は、制限のある毎日への圧迫感を抱いており⁵⁾、特に今回の事例のような成人男性の場合は、仕事をしながら生活調整する難しさを経験し⁶⁾、自制や制約に対する負担感や家族・仕事に対する責任への負担感を抱きながら生活していることが明らかになっている⁷⁾。これまでは、患者の問題点に着目し、それを是正する方向で看護計画を立案する学生が多かったが、このような特徴のある患者に対し、問題を指摘し改善点を指導する方法では、治療の継続が困難になる可能性がある。今回、学生は患者のストレングスと望む将来像の明確化のメリットに気づくことができたことで、患者本人を中心とした支援を考えることができ、「慢性疾患患者支援への影響:」として医療者の押し付けではなく、患者の生活と折り合いをつけた支援が、重要であると気づくことができていたと考えられた。

しかし、この気づきから実際の看護計画がどのように表現されていたかは明らかではないため、今後はこれを確認し実践に結び付けることができるような教育を検討する必要があると示唆された。

また、学生が患者のストレンクスと望む将来像を明確にすることは、「相互作用への影響：」として、患者への愛おしさを感じることに繋がっていた。西田は、看護におけるケアリングは、「相手に寄り添いたい、寄り添わねばならない」と真に感じ取る能動的な願いや思いを根底にもった実践知としての看護実践全体である⁸⁾と述べている。このことから、ストレンクスと望む将来像を明確にすることは、学生の患者へ向かう思いを愛おしさという、「相手に寄り添いたい」思いに変え、ケアリングの基盤を学ぶことにも繋がっていたと考えられた。

一方で、学生は「ストレンクス重視への危惧：」と「患者不在のケアミーティングへの危惧：」にも気づいていた。これは、患者のストレンクスを看護計画に取り入れることで、患者自身が療養に取り組みやすくなると考えられるが、医療者として患者の問題を指摘する必要性や、患者の望む将来像が、医療者の想像であるからこそ認識のずれが生じないように支援することの重要性にも気づいていると言える。そのため、患者のストレンクスや望む将来像を捉え看護に活かす方法を取り入れながらも、ストレンクスに偏ることなく、患者の反応を評価しながら看護することを教育する必要があると示唆された。

2. 看護過程演習にケアミーティングを取り入れることの有用性について

学生にとって紙上事例から看護展開をすることは、患者像をイメージしづらいために困難であることが多く、視聴覚教材の利用⁹⁾などにより患者理解を促す工夫が行われている。今回演習に取り入れたケアミーティングでは、紙上の限られた情報のみでも、ストレンクスや望む将来像を話し合うことで、患者理解を促進でき、そこから学生は、患者の望む将来を想像でき、そこに向かうための具体的な看護計画を創造することができていた。中村らは、セルフケア支援の理解を深める演習において、学生は、患者の発達段階の特徴を捉えた視点での支援が不足していた¹⁰⁾と報告している。今回の事例患者は、家庭でも社会でも重要な役割をもつ時期にあるが、ケアミーティングにより、患者の仕事や親の役割も考慮した支援を

考えることに繋がると示唆された。これは、「想像から創造へ：」という気づきが示すように、患者が、将来どのように過ごしたいかをイメージし、他者と共有したことで、そこに向かう現在の患者の生活の見方が変わり、患者のストレンクスを活かした、具体策を自然と考えることができていたのではないかと考えられた。また、学生は、この具体策が「実践への影響：」と「チームへの影響：」が示すように患者と医療者の意欲向上や医療者の成長にも繋がる可能性に気づいていた。糖尿病患者を支援する看護師は、自身も目標を持ちながら患者教育を行うが、力量不足やシステムの不備により難しさを感じ、目標に到達できない無力感に至る場合があることが明らかになっている¹¹⁾。しかし、患者のストレンクスに目を向け実現可能な計画を提案することが、患者のみならず、看護師自身やチームも前向きに支援できることを学生が実感できたと考えられた。このことから、実践においても、患者のストレンクスを支援に活かすことを意識した関わりが重要になると示唆された。

そして、これらの気づきは「改めて見つめる看護：」に繋がっており、学生は、今までは見逃していた小さな気づきや違和感に気づくことの大切さを学んでいた。ベナーは、臨床家が認識し解決しようとしている問題を明確にするためには、鋭敏な知覚が必要であり、判断が下せるのは、知覚したものに関してだけである¹²⁾と述べている。今回のケアミーティングを通して、学生は、患者のストレンクスや問題を知覚することができたために、患者に必要な看護に繋げることができていたと言える。このことから、ケアミーティングを行うことは、学生の鋭敏な知覚能力、つまり感性を育むことにも繋がると示唆された。

3. 看護過程演習にケアミーティングを取り入れる上での限界と今後の課題

ケアミーティングの実施について、「ケアミーティングで感じた難しさ：」や「実施上の注意点：」という課題が挙げられた。一方で、学生は「時間管理の重要性を実感：」し、時間制限がある中で集中した話し合いができるためのスキルを身につけることの必要性、患者についてわかっていることは一部であるという自覚を持つことにも気づいていた。ケアミーティングを看護過程演習に取り入れる際は、時間管理を行う中で、患者の事実と学生の意見を明確に区別して話し合い

計画の立案ができていないか、確認していく必要があると示唆された。

V. 結論

2 型糖尿病患者の事例を用いた看護過程演習にケアミーティングを取り入れ、患者のストレスや望む将来を考えたことで、学生は「ストレスと望む将来像の明確化のメリット：」に気づき、ケアミーティングを通しては「想像から創造へ：」や「改めて見つめる看護：」を学ぶ一方で、「実施上の注意点：」といった気づきを得ていた。本研究結果より、看護過程演習にケアミーティングを取り入れることの有用性と今後の課題が明確となった。

利益相反 (COI) について

本研究に開示すべき COI はない。

引用文献

- 1) 内海香子, 鈴木純恵, 佐藤佳子, 他 (2013) : 看護系 A 大学の学生が認識する成人看護学領域での看護過程演習における困難と指導方法の検討, 獨協医科大学看護学部紀要, 7 巻, 23-37.
- 2) 松井陽子, 桐山啓一郎, 矢吹明子 (2018) : 朝日大学精神看護学実習における患者のストレスの視点を導入したアセスメント, 朝日大学保健医療学部看護学科紀要, 第 4 号, 43-46.
- 3) 長谷川理恵 (2018) : アドラー心理学に基づく事例検討プログラム「ケアミーティング」, <https://adlersociety.files.wordpress.com/2018/11/hasegawar2018.pdf> (検索日: 2019 年 12 月 21 日)
- 4) 山浦晴男 (2012) : 質的統合法入門—考え方と手順 (第 1 版), 23-77, 医学書院, 東京都.
- 5) 友竹千恵, 小平京子, 村上礼子, 他 (2004) : 外来に通院する糖尿病患者の生活上の困難さ, 自治医科大学看護学部紀要, 2 巻, 17-25.
- 6) 直成洋子, 板垣雅美, 渡辺春華 (2010) : 外来通院している 2 型糖尿病男性患者の生活上の困難さ, 茨城キリスト教大学看護学部紀要, 2 巻 (1), 37-44.
- 7) 光木幸子, 土居洋子 (2004) : 2 型糖尿病成人期男性の感情, 日本糖尿病教育・看護学会誌, 8 巻 (2), 108-117.
- 8) 西田絵美 (2018) : 看護における〈ケアリング〉の基底原理への視座:〈ケアリング〉とは何か, 日本看護倫理学会誌, 10 巻 (1), 8-15.
- 9) 佐藤栄子, 小野千沙子 (2016) : 成人慢性期の事例を用いた看護過程演習における教育効果: 紙上患者と DVD 教材の比較, 看護学研究紀要, 4 巻 (1), 11-19.
- 10) 中村織恵, 本谷久美子, 中井美鈴, 他 (2016) : 成人慢性疾患患者のセルフケア支援の理解を深める演習方法の検討—グループワークによるレポートの記述内容を分析して—, 東都医療大学紀要, 6 巻 (1), 57-62.
- 11) 多崎恵子, 稲垣美智子, 松井希代子, 他 (2006) : 糖尿病教育に携わっている看護師の実践に対する思い, 金沢大学つるま保健学会誌, 30 巻 (2), 203-210.
- 12) P.Benner, P.L.Hooper-Kyriakidis, D.Stannard (1999/井上智子監訳 2005) : ベナー 看護ケアの臨床知—行動しつつ考えること (第 1 版), 21-24, 医学書院, 東京都.